

聖書の中に大金持ちの主人が僕に莫大な金額を託して旅に出る、という話が出てきます。主イエスが語られたたとえ話です。あの時主人は迷わず自分の僕に莫大なお金を託したのでしょうか。それとも、どうなるか不安なままに預けたのでしょうか。

もし皆さんが莫大なお金、宝物を持っていて、それを銀行や金融機関ではなく、誰かに預けなければならない、という事情ができたとしたら、どうしますか。身内の人以外の人でなければならない、としたらどうしますか。ずいぶん考え、悩むのではないのでしょうか。しかし考えてみれば、預けられた方も、迷惑な話です。人のお金や宝物を預けられても、気が気ではないですよ。

しかしとにかく預けることになった。人を選ばなければならない。

ある説教者はルカによる福音書の1章はまるで、大金持ちが宝物を預けるように、神さまがご自分の最も大切な宝物を託していく、そういう物語だ、というのです。

最初にユダヤの王ヘロデの時代とあるようにヘロデの名前が挙がる。彼に託してはどうなのか。彼は王であるし、政治家である。神の宝は政治家にはならなかったし、政治的な手腕を発揮したわけでもない。だが、王に預けるといのはやはり選択肢の一つではないか。神の宝は人々に大きな影響を与えるのだから、政治家に預けることは都合のいいこともあるのではないか。けれど、ヘロデはこんな宝を受け取らないだろう。受け取らないだけでなく、自分の王としての存在を脅かすものとして不安になり、憎み、抹殺してしまう。事実彼は幼児殺しをしてしまう。

次に登場するのはザカリア。

ザカリア、いいじゃないか。祭司であって、妻のエリサベトと二人、神の前で正しい人で、主の掟と定めをすべてまもり、非のうちどころのない人とまで聖書に書かれている人。まず申し分のない人。と我々は思う。

だが神は彼に最も大切な宝物を託すことはしなかった。

その理由はわからない。ただ、彼は天使ガブリエルがあなたの妻エリサベトは男の子を産む、と告げたとき、「何によってわたしはそれを知ることができるでしょう。」と言って不信の思いをあらわした。神の前に正しく、非のうちどころのない人だったザカリアだったが、神の言葉が自分に臨むと、つまりいざ神の言葉が自分の現実となる、と聞かされた時、本当ですかそれは、証拠を見せてください、とまで言い始めた。それは本人が立派に生きているとか、まじめにやっているとか、という

こととは何ら関係ない、ザカリアの不信仰があらわれてきた、ということです。

そして最後に登場するのが、マリア。

神はその最も大切な宝物をこの一人の女性に、託し預ける。彼女は弱く、小さい存在。政治家のような力も、祭司のような立派さも、持ち合わせていない。大切な宝が託されたのは、この世界が気にも留めないような存在。ガブリエルはマリアに告げるのです。

「おめでとう、恵まれた方。主があなたと共におられる。」これが天使が語る最初の告知知らせでした。おめでとう、あなたは神の恵みの中にいる。主があなたと共におられる。マリアはなぜ自分がこのような祝福の言葉を受けるのか、わからなかったでしょう。戸惑い、何のことかと考え込みました。

天使ガブリエルは「あなたは身ごもって男の子を産むが、その子をイエスと名付けなさい。その子は偉大な人になり、いと高き方の子と呼ばれる。」

マリアは結婚もしていない。男の人也不知道。それなのに、出産するなんてとんでもないこと。ありえないこと。「どうして、そのようなことがありえましょう。」マリアは率直にガブリエルに語る。すると天使は、「聖霊があなたに降り、いと高き方の力があなたを包む。神にできないことは何一つない。」ガブリエルの言葉は、神の働きを一方向的に語る言葉でした。神の霊が降り、神の力があなたを包む。あなたは神の恵みの中にある。神が共にいてくださる。救い主の誕生は、神の業であってそれ以外ではない、とガブリエルは語る。だが、その神の一方向的な働きがあなたの身において起こっていくのだ、と語るのです。あなたは神の恵みの中に置かれ、神はあなたと共にある、と告知するのです。

マリアは弱く、小さな存在です。政治家のような力も、祭司のような立派さも持ち合わせていない、この世界が気にも留めない存在でした。

しかし神はこのマリアに最も大切な宝物を託し預けるのです。

マリアはここで驚くべき応答をするのです。

「わたしは主のはしためです。お言葉どおり、この身に成りますように。」

はしため、というのは奴隷、という意味の言葉です。わたしは神の奴隷です、とマリアは言う。それはどういうことなのか。わたしの判断が優先するのではなく、神の意のままになさってください、ということです。わたしが信じるとか信じないとか、わたしが納得するとかしない、そういうことが優先されるのではなく、神さまのみ心にわたしが従えますように、ということです。マリアにとって、結婚もしていないのに、妊娠する、救い主がこのわたしの胎内にやどり、その子をわたしが出産するという、それはありえないこと。それをどう受けとめていいのか、どうしたらいいのかわたしにはわからないけれど、決めるのはわた

しではない。わたしは神の奴隷、つまりわたしが主人ではなく、わたしは仕え従う僕だから、お言葉どおりこの身に成りますように。マリアはそう応えたのです。

大事なことは、神の働きに我が身が従うことです。「どうして、そのようなことがありえましょう。」という自分の思いに固執し続けることではない。

さて、最初のある説教者の言ったこと、ルカによる福音書の1章は、神がご自分の宝物を託していく物語だ、という言葉をもう一度思いめぐらしてみます。

神は確かにご自分の最も大切なものをマリアに託し預けました。そして、ルカの1章には、ヘロデでもザカリアでもなく、マリアに宝物が託されたことを語っています。しかし、注意深く読めばわかるように、聖書はマリアに宝物を託した理由を描こうとしてはいない。まず神の選びがあり、その選びの中で、マリアの応答が描かれている。

聖書がわたしたちに語りかけているのは、神の言葉の語りかけに、その人が事実出会った時の応答です。マタイ福音書によれば、ヘロデは主イエス誕生の知らせを聞いた時、不安になったというのです。ザカリアは信じられない、という自分の思いに固執した。しかしマリアは、天使の語りかけに聞いて、ザカリアとも似た「どうしてそのようなことがありえましょう。」と言いつつも、その自分の思いに固執せず、神さまのみ心に従えますように、と自分を明け渡していった。

この信仰の応答にこそ、聖書は目を向けている。

わたしたちもそのことにこそ、目を向けなければならない。

神の言葉が自分に語りかけられるとき、最後には、自分の思いに固執せず、神に自分を明け渡し、神さまのみ心に従えますように、と自分を差し出していく、マリアのような応答する信仰が求められているのです。

マリアは、弱く小さく、力も立派さもなかった。この世界が気にも留めないような存在だった。神は大切な宝物をマリアに託し預けられた。そしてマリアはそれに対して信仰において応答した。もしも我々が、マリアのように信仰において応答できないのだとすれば、それは何かを持ちすぎているのかもしれない。自分では何もない、何も持っていない、と言いつつも、たくさんものを抱え込み、自分の持っているわずかなものに頼り、ときにしがみつき、それで生きようとしていて、神さまが託そうとするものを両手が塞がって、受け取れないのかもしれない。本当は、人はそもそも弱く小さく、力もないのに、そのことを忘れて、持っていると思うものに振り回されているのかもしれない。わたしたちは、マリアをよく見つめなければならない。

ないことが、神の宝物を受け取らせたのだとしたら、わたしたちは、

どこかでないことに気づかなくてはならない。自分の持っているもの、力、知恵、お金、それが邪魔して神の宝物を受け取れないということもあるでしょう。しかし別にそれを全部捨てなければならないということではない。ただそれは、わたしの救いのための宝物ではない、ということには知らなくてはならない。

自分自身の救いのためには、何も持っていない自分に気づいて、神からの宝物を両手で受け取り、「わたしは主のはしためです。お言葉どおり、この身に成りますように。」という信仰の応答をしていくものになりたいと願うのです。